

経済的観点から見る日米のヒット曲の歌詞構造とその法則性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 茅根, 滋 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23515

経済的観点から見る日米のヒット曲の歌詞構造とその法則性

社会言語学演習 4年 茅根 滋

<要旨>

日常生活で困難や絶望に直面した時、私たちは癒しを求める。昨今、「環境音楽」と銘打った音源が世間を賑わせているように、音楽に安らぎを感じる人は多い。音楽の歌詞に感動し、共感することで、毎日の活力を得て困難を突破する人もいるだろう。メロディばかり強調されがちだが、歌詞の重要性を無視することはできない。そのような観点から、ヒットしている曲=多くの人に受け入れられている歌詞と考えた。

本稿の目的は、日米における商業的に成功する曲の歌詞のテーマ、意味はどのようなものであるかを1974年（以下74年）と1991年（以下91年）を比較し、歌詞の意味から浮かび上がる当時の社会状況を考察することである。74年、91年日米の年間ヒット10位以内の曲、総計40曲がその対象である。

調査結果として、日本の74年、91年を比較すると、両者とも恋愛をテーマとした歌詞が多かったが、前者では、女性の地位の低さ、男尊女卑を想起させる表現が使われていたのに対し、後者では、男女平等の立場のものであった。アメリカの74年、91年では、使われている品詞の語数に絶対的な違いが見られた。74年では、名詞の種類・数は多く、動詞の種類・数は少なかった。91年はその逆であった。

また、英語歌詞において、私の個人的な解釈で恋愛歌詞とそれ以外に分類し、それぞれの歌詞で直訳を試みた。それらから、前者では直訳は可能であり、後者は困難であるとの結論に達した。

日本語と英語は別次元で考えなくてはならない。もうひとつの言語、文化として認識することによって、自らの価値基準が絶対的なものではないと分かるようになるのだ。

<目次>

1. はじめに
 1. 1 歌詞の重要性
 1. 2 対象とする曲とその分析方法
 1. 3 歌詞が喚起する映像
 1. 4 本稿の構成
 1. 5 問題提起
 1. 6 仮説
 2. 邦楽・洋楽のヒット曲についての分析
 2. 1 調査方法
 2. 2 取り上げる年
 2. 3 邦楽の調査結果
 - 2-3-1 74年
 - 2-3-2 91年
 - 2-3-3 解釈とまとめ
 2. 4 洋楽の調査結果
 - 2-4-1 74年
 - 2-4-2 91年
 - 2-4-3 解釈とまとめ
 3. 邦楽と洋楽の歌詞関係
直訳は可能か
 4. 考察
- 注釈
参考資料

1章 はじめに

1.1 曲の歌詞の重要性

街を歩けば音楽を耳にする。テレビをつければ音楽が流れている。雑誌を開けば音楽情報の文字が踊っている。それらの多くは、望むと望まざると、否応無しに耳に入り込み、我々は、取捨選択することもなくそれらを聞き流している。私たちが音楽を耳にしない日はない。今日はモーツァルトが優雅で美しい旋律を奏でていた時代ではないのだ。現在、音楽は大衆化している。その意味で、音楽はもはや我々の身体の一部と化しているといっても決して誇張ではない。

曲を気に入るとき、私たちは、最初にそのメロディに惹かれることが多い。しかし、無意識のうちに曲の歌詞を口ずさんでいることも多々ある。このことから、歌詞はリスナーに対して少なからず影響力を及ぼしていることがわかる。

巷に氾濫する音楽であるが、注意深く聞くと、それらの多くが商業的に成功を収めている曲であることが分かる。成功する曲の大部分は「ポップス」と呼ばれるジャンルのものである。音楽とは感情を表現する芸術である。「音」に乗せて歌われる「言葉」、つまり歌詞も音楽では重要な役割をもつ。それらを分析することで、歌詞に反映される、様々な時代の人々の考え方を理解する手がかりとなるであろう。

ヒットチャートに名を連ねる曲のメロディは、大衆性を感じるものだが、それらの歌詞はどのようなことを歌ったものなのだろうか。歌詞はアーティストの感性そのものであり、私たちはそれらに自らを投影し、共感すると考えられる。私たちの曲の嗜好において、歌詞の占有率が高いと考え、興味を抱いた。

また、邦楽の中に英語詞が取り入れられているのはなぜだろうか。歌詞の意味が曖昧に解釈され

る英語詞をあえて用いる理由を探る。

定義付け：

ポップスとはpopular musicの略である。昔から、大衆を惹き付ける音楽は現在「ポップス」と呼ばれるものが主流であったため、大衆性を帯びる音楽は「ポップス」とジャンル分けされるようになった。大衆性＝商業的成功と考えられるが、「ポップ」だが売れないものもあるわけで、ここでは最も多数の聴衆を惹き付ける事が可能と思われる音楽を「ポップス」と定義付けする。取り上げる曲は、ヒットしている曲、特にヒットチャートの10位以内に入った曲が中心となる。

1.2 対象とする曲とその分析方法

対象とする曲は、日本とアメリカのヒットチャート10位以内の曲とする。アメリカを挙げたのは、アメリカが楽曲オンラインビジネスに代表されるように、音楽産業の最先端を行く一方で、アフリカ人「奴隷」がジャズを生み出したそのある種「自由」な土壌（注1）など、文化的にも音楽に大きな影響を与えていると考えられるからである。両者ともに1970年代と1990年代のチャートを比較する。用いる資料はオリコン、ビルボード社（注2）を考えている。分析方法は、上記の資料から一曲一曲歌詞のテーマを調べ、それらの統計をとる。各年代毎に、歌詞に使われている言葉の意味、それらから推測される社会の状況を考察する。

1.3 歌詞が喚起する映像

人は辛いとき、苦しいときなど、やりきれなくなったときに音楽に活路を見出す。音楽の歌詞に共感し、明日を生きる活力を得るのである。歌詞に自分をなぞり、その情景を思い起こす。本でも映画でも構わないが、ハッとするような言葉に出会ったときに、私たちは頭の中に空間的な広がり

を感じることもある。そのような言葉とはどのようなものか。それを明らかにする。

例えば、次のような歌詞がある。

I wish I never saw the sunshine,
(太陽の光をしらなかつたらよかつた)

I wish I never saw the sunshine,
(太陽の光をしらなかつたら)

An' if I never saw the sunshine bay,
(もしも太陽の光をしらなかつたら)

Then maybe I wouldn't mind the rain.
(こんな雨の日もつらくはなかつたのに)

(I wish I never saw the sunshine
作詞：ベス・オートン 訳：藤野 治美)

ドイツでは、冬になると太陽の光りを見ることができなくなるといふ。この歌詞に触れた時、私はドイツを連想することはなかつたが、大変共感を覚えた。現在では、マスコミの影響もあり、ヒット曲から純粋に歌詞の重要性を説くことはできないかもしれない。しかし、70年代はアメリカでもパンクロック（注2）ムーブメントが起こり、社会批判、政治的歌词が共感を呼び、ファッション、美術にも影響を与えた時代である。その風潮は日本にもあつたであろうし、歌詞に注目する人々も多かつたに違いない。

1.4 本稿の構成

本稿は4章から構成されている。

1章では、本稿の要旨・歌詞の重要性について触れる。2章では、1974年と1991年における曲の歌詞の意味を分析し、その比較を行う。3章では、英語詞の直訳と日本語詞の関係について述べる。4章で反省と今後の展望を記す。

1.5 問題提起

感情には、愛情・憎しみ・嫉妬など様々な情が含まれている。日米とも歌詞に使われるテーマで最も多く、かつ商業的成功にも恵まれるのと考えられるのは、「愛情」であろう。実際、「恋愛」をテーマにした曲は多い。「恋愛」詞の絶対数が多い分、ヒットする曲の中心の歌詞もおのずとそのテーマになるであろう。

政治的歌词や思想的歌词は現実的過ぎるが故に、大衆には好まれないと推測される。今日、人は毎日仕事や勉強に追われ、息をつく暇もないほどに動いている。よく趣味やリラックス法に音楽鑑賞を挙げる人がいるが、彼らは恐らく、日常生活の喧騒から乖離し、音楽に安らぎを求めているのではないか。そのため、比較的重い政治的歌词などではなく、恋愛といった甘い歌词に現実逃避しているのではないだろうか。

一方で、慢性的に政治的・社会的不満が続けば、民衆を煽るような歌词が受け入れられるだろう。70年代のアメリカのパンクムーブメントがその代表である。

「日本文化は形骸化していて、アイデンティティに欠けている」

文化比較論ではよく議論される言葉である。小島（1981）（注3）は、「日本人本来の音楽感覚を捨てて、ヨーロッパの楽器や楽譜やハーモニーの奴隷、つまり道具になってしまった」、「日本人は、形は自由だったけれど、心と音楽はヨーロッパ文化の奴隷になった」と述べている。日本の欧米コンプレックスといったものも同じ類であろう。それは歌词についても当てはまるのだろうか。

そもそも、なぜ日本人は日本語詞だけではなく英語詞でも歌うのだろうか。今まで日本人は、英語が「話せない、書けない、聞き取れない」のないない尽くして通ってきた。そのような人種が、母語でない英語で繊細な感情を表現することは不

可能と言えるだろう。というのも、日本語にも英語にも、ひとつの単語に何通りもの意味があるからである。母語でなければ正確なニュアンス、すなわち微妙な意味の差は表現できないし、たとえばできたとしても、その真意が第三者に伝わるかは疑問である。

画家が自らの思想を体現する手段として絵を描くように、作詞者には「伝えたいこと」があり、それを様々な人に聞いて欲しいという希望からこそ、曲を書き、歌詞を記すのである。「伝えたいこと」と「作詞側と第三者の解釈」。音楽は、作り手から第三者への一方通行の上、無数の人間の耳に入る性格を持つ。それ故、作詞者側の真意と第三者の捉え方に違いが生じるのは、至極当然と言えるだろう。

そのような違いは認識されていないのかもしれない。“抱きしめて HOLD ME”などという陳腐で意味不明の歌詞があると仮定しよう。多くの日本人は言語コードの切り替えができるほど英語に通じていない。日本語に訳すと、“抱きしめて抱きしめて”である。英語で言う必要があるのだろうか。

日本のアーティストの英語詞は、欧米への潜在的な羨望の表れと言えよう。世界的な成功を目指すには英語詞が必須となるだろうが、そういった理由で英語詞を取り入れているのはごく少数だろう。

1.6 仮説

70年代と90年代とでは、ヒットする歌詞のテーマは異なっているだろう。音楽は時代を映し出す鏡である。人は自分を投影できる、つまり共感できる歌詞に惹かれる。「朱に交われば赤くなる」という諺があるように、環境によって人の感情も変化するため、二つの時代でテーマが同じということはないと推測される。しかし、そのような時

事的テーマとは別に、普遍的なテーマが存在するだろう。それはやはり「恋愛」と考えられる。70・90年代ともにヒット歌詞のテーマは「恋愛」と「時事問題」が中心となるだろう。

日本のアーティストが英語詞を多用する理由としては、欧米コンプレックスではないだろう。日本語詞では意味がそのまま直接伝わってしまい、時として意味が強すぎることもあるのではないか。そのため英語詞を使用することにより、その部分の意味を曖昧にし、第三者にその解釈を委ねるという意向があると推測する。また、音韻の関係上リズム感を強調するために英語詞を用いるとも考えられよう。

英語詞の直訳は不可能である。アーティストは育った環境の中で歌詞を書くのであり、その国や地域の基本的な文化背景を理解しなくては、英語詞の真の意味は分からないだろう。直訳では表面的な意味に終始するばかりで、その裏にある意味は理解できまい。

歌詞がセールスに与える影響は大きいであろう。ひとつ曲にはひとつの歌詞しか適応しない。曲は音と歌詞で構成されており、その絶妙な相乗効果は、他の歌詞では実現できないだろう。その音に合った歌詞、その歌詞に合った音、その組み合わせは一通りしか存在しないのだ。

2章 邦楽・洋楽の歌詞調査

2.1 調査方法

曲毎に歌詞を考察し、そのテーマを定める。歌詞中にどんなキーワードが隠されているのか、どのような言葉が頻出しているのかについて統計を取り、データ化する。同じテーマの曲でも、異なるアプローチで歌ったものもあるだろうし、その場合には、用いられている言葉の類も違っているだろう。同じテーマの場合も、男性と女性が歌う

歌詞にも相違があると考えられる。

具体的には、i) どのような単語（本稿では、単体で意味を成す語、名詞・動詞・形容詞・副詞・形容動詞などを単語と定義する。）で構成されているか、ii) 単語はどのような品詞、意味範疇に属する語が多いか、iii)、単語の意味と歌詞テーマの関連性、iv) 歌詞に含まれる単語の意味の傾向から、社会の状況・変化を考える。

2.2 取り上げる年代

戦後、日本はアメリカ主導の下、高度経済成長を遂げた。神武景気・岩戸景気・いざなぎ景気といった好景気に恵まれ、日本経済は右肩上がりを受け、その勢いが永遠であるかのような錯覚を感じるほどだった。それは、日本が「陽出る国」と呼ばれるのに相応しいものだった。しかし、1973年に石油危機が起こり、輸入依存国である日本は、大打撃を受け、翌1974年、戦後初のマイナス成長となった。

同じように、1980年代後半からは、バブル景気が起こり、国民はかつての石油危機の事を忘れ狂気乱舞した。そんなバブル景気も、文字通り泡のように消え、国民に残されたのは未曾有の不景気だった。1991年。歴史は繰り返す。

1974年と1991年は、類似性を持つ年と言える。両者とも、直前まで好景気に湧き、その後突然の不景気に陥るといった共通点がそれである。

アメリカに目を向けてみる。1965年から本格化したベトナム戦争により、アメリカの輸出超過となった。ドルの流出が続き、アメリカ経済は疲弊した。1971年にアメリカは、金とドルの交換を停止し、金本位制を取りやめたほか、10%の輸入課徴金を内容とした新経済体制を発表した。それに伴い、日本は開放経済体制に組み込まれ、日本の対米輸出は、自動車などの工業製品で増大し、貿易摩擦が深刻化した。このようにアメリカにとっ

ても、1974年ごろは敏感な年代だったのである。

政治的・文化的観点からも見てみよう。1970年代の日本は、日米安保条約の継続が決定されたこともあり、政治的アジテーションがあったと思われる。

小川（1999）が言うように、ただ眺めているだけ、聴いているだけでは「歌詞カードからは何も浮かび上がってこない」。（注4）ならば、調査する年代の時代背景を理解することが、歌詞理解への近道となろう。70年代の人々は、20年後の姿を想像できたであろうか。恐らく否であろう。時間と共に、嗜好する音楽は変わっていく。つまり、人は変わっていくものなのだ。

2.3 調査結果

調査統計として、日本・アメリカの1974・91年ヒットチャート10位以内の曲合わせて40曲を取り上げた。単語の調査は、原則として曲の2番（注4）までであり、それ以降の部分は、歌詞が既出していない部分のみ統計に入れた。名詞+動詞で表される単語（例：夢見る）、形容動詞（素敵だ、幸せだ）などは、名詞を切り離して集計した。

歌詞の単語の意味を分析したところ、名詞と動詞を中心に文が構成され、形容詞・形容動詞・副詞といった品詞は、それらを修飾しているに過ぎず、文の骨格を形成していないため、名詞・動詞を主眼に考える。

2-3-1 74年のヒット曲の歌詞成分

74年の年間ヒット曲の歌詞から、単語（名詞・動詞・形容詞・形容動詞・副詞）を取り上げたところ、以下のような割合で歌詞が形成されていることがわかった。人称を表す語には主格・目的格・所有格（例：私は・私に・私の）が含まれている。

	人称	名詞	動詞	その他	総数
1位：なみだの操	(5語)	(22語)	(17語)	(4語)	(48語)
2位：あなた	(16語)	(24語)	(11語)	(13語)	(64語)
3位：うそ	(3語)	(33語)	(19語)	(9語)	(64語)
4位：ふれあい	(無し)	(25語)	(14語)	(1語)	(40語)
5位：恋のダイヤル6700	(10語)	(34語)	(20語)	(1語)	(65語)
6位：夫婦鏡	(7語)	(26語)	(22語)	(3語)	(58語)
7位：くちなしの花	(5語)	(30語)	(10語)	(5語)	(50語)
8位：激しい恋	(2語)	(24語)	(26語)	(7語)	(59語)
9位：積木の部屋	(4語)	(30語)	(19語)	(12語)	(65語)
10位：学園天国	(3語)	(32語)	(14語)	(無し)	(49語)

人称を表す語、動詞、名詞が骨格となっていることから、それらを分析する。総単語数は652語、一曲あたりに使われている語は平均65語であった。人称を表す語は、10曲中9曲で用いられ、総単語数に占める割合は8.4% (55/652) であった。動詞は、26.3% (172/652) を占めた。名詞（人称名詞を除く）は42.9% (280/652) であった（人称名詞を加えた場合：51.3% (335/652)）。

- ①人称を表す語の中では、一人称の“私”、“僕”は21.8% (12/55) であった。二人称を表す単語“あなた”、“お前”が8曲で61.8% (34/55) 用いられていた。1曲では、二人称の語は使われなかったということになる。4位の「ふれあい」では、人称名詞自体使われていなかった。
- ②動詞の中では、突出して使われている言葉も無く、差異化を明確にすることが困難であった。それだけ多様な動詞が用いられているということである。
- ③名詞では、“女”という単語は5.0% (14/280) あり、次いで“恋・愛”は3.5% (10/280)、“花”は2.8% (8/280) となっている。

文の構成を見ても。“あなた”という単語だけでは第三者には意味が伝わらない。その後に関

く単語が文の意味を決定する。「あなた」＋願望を表す表現が最も多く29.4% (34/10)、「あなた」＋名詞の形も14.7% (5/34) 用いられていた。例えば「なみだの操」では、「あなたを疑いたくない」、「あなたの決して お邪魔はしないから おそばに置いて ほしいのよ」、「夫婦鏡」では、「あなたの名前」、「あなたのうそ」といった言い回しがされている。

歌詞の内容を見ても。10曲中3曲は前向きな恋愛歌詞であった。「あなたが好き 死ぬほど好き この愛受けとめて 欲しいよ」(ハローダイヤル6700)、「やめろと言われたら よけいに燃えあがる この身を引き裂く迄 恋にこがれて 焼かれて」(激しい恋)、「あーあの横顔を あーみつめられたら 授業中天国だよ」(学園天国)からそう判断できよう。他の7曲の場合はどうであろうか。

「棄てられたあと 暮らしてゆけない 私に悪いところが あるのなら 教えてきつと 直すから」(なみだの操)、「あなたが居て欲しい それが私の夢だったのよ いとしいあなたは 今どこに」(あなた)、「哀しい嘘の つける人 あなた残した わるいくせ」(うそ)、「悲しみに 出会うたび あの人を 思い出す」(ふれあい)、「あなたの重荷になりたくないのよ 夫婦鏡にうつし

出す 別れの薄化粧」(夫婦鏡)、「くちなしの花
おまえのような花だった 小さな幸せそれさえも
捨ててしまった 自分の手から」(くちなしの花)、「限りないもめごと嘘も 別れだとなれば
なつかしい もしも どちらかもっと強い気持ちでいたら 愛は続いていたのか」(積木の部屋)。

以上のように、10曲中7曲において失恋と判断できる歌詞内容になっている。そのことを裏付ける言葉を調査してみると、悲観的な歌詞内容が含まれているだけではなく、失恋と考えられる7曲全てで、過去形を用いて心情を表現している。単語レベルでは歌詞に共通点は見られなかったが、単語の属性、表現手段といった観点からわかる共通点がそれであろう。

文法用語の便宜上、「過去形」としているが、実際には過去のことを言っていないことも多い。「それが私の夢だったのよ」(なみだの操)にあるように、「～だった」は過去形で表現されてい

るが、現在についても触れていると解釈できよう。過去形を用いることで、過去に対する後悔と、「こうだったらよかったのに」という現在の願望が見て取れる。「あなたのためなら 言いつけを守るのは 私の務めよ」、「あなたに迷惑かけたくないのよ 夫婦鏡の片方を 形見に抱きしめて 悲しく身をひいた 女がいたことを 憶えていてほしい」(夫婦鏡)、「泣かずに待ちます いつまでも 女だから」(なみだの操)では、女性の控えめな姿勢が歌われている。「女性は男性の一步後ろを歩く」という暗黙の了解があり、男尊女卑がまことしやかに囁かれ、美德とされていた時代の産物なのかもしれない。

歌詞を構成する文の構造は比較的単純なものが多い。文は通常、名詞・動詞・形容詞・副詞などで構成されているが、74年の歌詞を見ると、一文が名詞と動詞で成立し、それらを修飾する語があまり使われていないことがわかった。平易な言い回しが受け入れられる傾向にあったのだろうか。

2-3-2 91年ヒット曲の歌詞成分

	人称	名詞	動詞	その他	総数
1位：ラブストーリーは突然に	(13語)	(30語)	(21語)	(3語)	(67語)
2位：SAY YES	(7語)	(30語)	(24語)	(4語)	(65語)
3位：愛は勝つ	(4語)	(23語)	(27語)	(11語)	(65語)
4位：どんときも。	(9語)	(34語)	(27語)	(2語)	(72語)
5位：はじまりはいつも雨	(10語)	(41語)	(17語)	(2語)	(69語)
6位：あなたに会えてよかった	(11語)	(35語)	(33語)	(15語)	(94語)
7位：LADY NAVIGATION	(8語)	(30語)	(19語)	(9語)	(66語)
8位：しゃぼん玉	(5語)	(29語)	(30語)	(14語)	(78語)
9位：EYES TO ME	(5語)	(37語)	(32語)	(4語)	(78語)
10位：ALONE	(8語)	(31語)	(31語)	(17語)	(87語)

ここでも、上記のように、人称を表す語、動詞、名詞が中心なので、それらを中心に考える。総単語数は741語であり、一曲あたりに使われている語は平均74語である。人称を表す語が、総単語数

に占める割合は、10.7% (80/741) であった。動詞は、35.2% (261/741) を占め、名詞は43.1% (320/741) であった。

①二人称を表す単語“あなた”、“君”は全体の5.7% (42/741) である。人称を表す語の中では、52.5% (42/80) であった。次いで多いのは、一人称を示す“僕”、“わたし”は、人称を表す語の中では33.7% (27/80) だった。

②動詞の種類が増加が挙げられよう。“ひっかける”、“ぶら下がる”、“溶かす”など、71年での歌詞では使われていない単語が目につく。さらに、“消える”、“無くす”というように、似たような意味を違う単語で表現しているのも興味深い。

③名詞（人称を表す語を除く）の中で、最も使われていた単語は“愛”であり、名詞の中だけで5.6% (18/320) だった。各歌詞で使われている単語の数は、平均74語であり、71年（総数652語・平均65語）と比較すると明らかに多くなっている。

文の構成としては、意味を成すひとつの文に含まれる単語数が多いことがわかる。「消えたいくらい辛い気持ち抱えていても 鏡の前笑ってみる まだ平気みたいだよ」（どんなときも。）「新しい暮らしにも 少しは慣れてきたけど 勝手な僕は 君を思い出す」（ALONE）に代表されるように、骨格となる主語・動詞のほかに、それらを補足説明する言葉が使われ、一文が複雑化の傾向にある。

歌詞の内容についても、71年と91年では違いが見られる。71年は、悲観的な歌詞内容が主流であったのに対し、91年は9曲で恋愛歌詞と判断できるが、その内容はポジティブなものが8曲ある。それらは、「君を守る」、「君のために」といった表現から判断できよう。

人はポジティブな歌詞に惹かれる傾向があると考えられる。現実では困難の連続だからこそ、音楽というバーチャルな世界観の中では、恋愛の主役を演じてみたいと願うのだろう。予想通り恋愛関連の歌詞が大半を占めていた中で、4位の「ど

んなときも。」が異色である。異色という表現は間違いかもしれない。人間は様々な側面を持っており、恋愛はその一部にしか過ぎない。「どんなときも。」のような、自分の過去・未来を見つめるものも、本来人間に備わっているものだろう。歌詞は歌い手の気持ちを表現したものである。人間にとって極めて一部分的な恋愛歌詞が支持されるのはどうしてだろうか。

社会化が進み、メディアの発達、情報過多などにより、言葉が多く使われるようになった。我々は意識する・しないに関わらず、それらを見聞きし、消化している。結果、多種多様な言葉は当たり前のよう感じており、必要最低限の言葉だけでは、情報不足と認識されかねない。90年代では、70年代にあった平易な表現で歌詞を理解し、足りない部分は想像力で補うという、本来の芸術の楽しさが薄れているように感じる。感情を伝える手段は言葉だけではなく、その微妙なニュアンスにもあるだろう。それを感じるゆとりを与えられない現代だからこそ、矢継ぎ早に言葉が出てくる歌詞になっているのかもしれない。

2-3-3 調査のまとめと解釈

70年代の場合は、歌詞構造は簡単で、複雑な言い回しは少ないと推測される。使われている単語の種類も多くはなく、特に動詞は日常生活で使われるものが大半であろう。恋愛歌詞の場合、悲観的である可能性が高い。

一方、90年代は言葉の氾濫からか、歌詞は複雑であり、使われる語彙数も多い。歌詞内容はポジティブであると考えられる。音に詰め込まれる言葉の文字数も多くなっている。

2.4 洋楽の調査結果

英語は、動作を表す主体、つまり主語を厳密に記す言語である。その性格上、人称を表す語、動

詞、名詞を中心に考えていく。

2-4-1 74年の歌詞成分

	人稱	名詞	動詞	その他	総数
1位 The Way We Were	12語	16語	13語	9語	50語
2位 Seasons in the sun	22語	49語	41語	15語	127語
3位 Love's Theme	インストゥルメンタル曲につき歌詞無し				
4位 Come And Get Your Lov	8語	11語	27語	7語	53語
5位 Dancing Machine	11語	16語	24語	11語	62語
6位 The Loco-Motion	9語	19語	25語	10語	63語
7位 TSOP	ジャズにつき歌詞無し				
8位 The streak	9語	27語	19語	6語	61語
9位 Bennie And The Jets	9語	21語	21語	12語	63語
10位 One Hell Of A Woman	17語	13語	9語	16語	55語

74年の歌詞では、人稱を表す語の場合、総単語数に占める割合は20.0% (107/534)、動詞は33.5% (179/534) であった。名詞（人稱を表す語を除く）は全体で32.2% (172/534) だった。人稱を表す語は20.0% (107/534)、動詞は33.5% (179/534) 用いられていた。総単語数は、534語であった。人稱を表す語、動詞、名詞別に見てみる。

①人稱を表す語を見てみると、“we”は21.2% (20/97)、“you”は17.5% (17/97)、“I”は9.9% (9/97)、“she”は28.2% (27/97) であった。“they”はあまり使われず、4% (4/97) であった。特に“I”、“you”が多くの歌詞で満遍なく用いられていた。その二つが使われている割合は90% (9/10曲) であった。

②動詞では、“give”、“have”や“get”など日常会話で話される単語が使われ、使用頻度の差はなかった。また、呼びかけである“baby”、“hey”が4曲で見られた (1.4%、8/534)。91年には1曲で用いられたのみだった (0.6%、6/867)。

③名詞では、様々な名詞が使われ、特に多く使用

されている単語は見出せなかった。恋愛歌詞でも、“love”と表現するのではなく、多彩な状況描写で歌っていた。“we had joy, we had fun, we had seasons in the sun”などがそうである。それらは作詞者の独特な表現方法の結果と言えよう。売れる曲の歌詞=伝いたいことが多くの人に共感される、つまり、ありふれた俗人の発想ではない、天才的で新鮮なものが売れる歌詞であると考えられる。陳腐な、使い回された単語だけを並べていては、人々を感動させる歌詞は創造できない。その意味で、売れるべくして売れた歌詞であるのだ。

74年の特筆すべき点として、インストゥルメンタル曲 (注6) がヒットしていることが挙げられる。歌詞の無い曲が売れるのはどうしてだろうか。

「1-1 歌詞の重要性」で述べた私の意見と矛盾するように思える。音だけで大衆を感動させることができるのだろうか。私の考えは、否である。クラシック音楽はなぜヒットチャートに入らないのか。音だけでは、人々には不完全であり、インパクトに欠ける。7位の「TSOP」は黒人音楽である。黒人の差別意識を表現し、世論も黒人擁護

の風潮だったため、一種の流行で売れたのではないだろうか。現に、2001年のヒットチャートを見

ても、黒人のインストゥルメンタル曲は入っていない。

2-4-2 91年の歌詞成分

	人称	名詞	動詞	その他	総数
1位 (EVERYTHING I DO) I DO IT FOR YOU	17語	14語	25語	7語	63語
2位 I Wanna Sex You Up	31語	14語	43語	8語	96語
3位 GONNA MAKE YOU SWEAT	24語	54語	57語	23語	158語
4位 Rush Rush	26語	25語	34語	11語	96語
5位 ONE MORE TRY	21語	8語	20語	7語	56語
6位 UNBELIEVABLE	19語	18語	34語	10語	81語
7位 More Than Words	32語	13語	38語	7語	90語
8位 I Like The Way (The Kissing Game)	26語	12語	22語	14語	74語
9位 The First Time	16語	23語	25語	15語	79語
10位 Baby, Baby	20語	30語	12語	12語	74語

91年の歌詞成分に関しても74年と同様、人称を表す語、動詞、名詞を中心に考える。

91年の場合では名詞は全体で24.3% (211/867)、人称を表す語26.8% (232/867)、動詞は35.8% (310/867)であった。総単語数を見ると、867語となっている。以下からは74年と同じく、人称を表す語、動詞、名詞別の割合で示した。

①人称を表す語では、“we”4.7% (11/232)、“you”46.5% (107/232)、“I”19.4% (45/232)、“they”はわずか0.9% (2/232)であった。数字だけを見てみると、“we”が多く用いられているが、実際には全ての歌詞で使われていると言う訳ではない。主格を表す単語、特に“I”、“you”が多くの歌詞で満遍なく用いられていた。それらは割合は100%であった。英語は日本語とは異なり、人称の区別が明確である。「私」・「あなた」の歌詞内容だからといって、すぐに恋愛歌詞と決め付けることはでき

ない。というのも、英語では“you”は必ずしも特定の「あなた」を指すとは限らず、不特定多数の人間を示す場合もあるからである。その場合には、“they”も用いられるのだが、歌詞においては、あまりその例は見られない。なぜ“they”の使用頻度は低いのだろうか。“they”は「people in general」(オックスフォード現代英英辞典 開拓社 1974年)と定義される。アメリカ文化は個人が尊重され、「個」と「個」の関係が重要視される。それだけに第三者的な“they”は避けられるのではないだろうか。

②動詞では、“make”、“know”共に3.8% (11/310)、“say”は3.9% (12/310)となっている。やはり、平易な単語が多く使用されているが、74年に比べると、その種類は多い。また、“wanna”、“gonna”、“ain't”といった省略形が使われているのが興味深い。これは74年の歌詞では見られなかったものである。呼びかけである“baby”、“hey”は、わずか0.6%、(6

／867語、1／10曲) で用いられたのみだった。74年、91年では、使われている単語の種類が異なることがわかった。前者では、名詞は多彩であるが、動詞は簡単なもの、後者はその逆であり、“wanna”、“gonna”等の非標準とされる方言が広く認知されている。どのような社会の動きがあったのだろうか。

③名詞では、10曲中7曲で“love”の単語が7.6% (16／211) の割合で使われ、他では“time”4.7% (10／211) などであった。74年では、恋愛歌詞でも“love”と表現しなかったが、91年では直接に歌っている。“fall in love”や“I love you”といった形がそうである。抽象的な概念をそれを表す単語で表現している。

2-4-3 調査のまとめと解釈

総単語数の観点に着目すると、534語 (74年)、867語 (91年) の結果から、両者の間には、用いられている単語数に決定的な差があることがわかる。

70年代は、状況を描写する歌詞が多く見られ、単語の種類は名詞に限っては多いが、相対的には少ないだろう。90年代は単語の数は多いが種類が少ない。動詞は難解な単語は使われておらず、単純な言い方で表現していた。私たちは英語を学び、その中には、どんな単語も知っている英単語博士のような者もいるが、実際の言い回し (少なくとも歌詞においては) では、いくつかの単語をニュアンスで使い回している。こうした事実は、英語圏で生活していない私たちの英語理解を困難にさせているだろう。というのも、同じ単語でも、状況によって意味が異なるということが、往々にしてあるからである。

91年で見られた“wanna”、“gonna”などの省略形は方言であるため、一部の地域でしか話されなかった表現であろう。74年では全く使われていなかったこれらの表現が、市民権を得るようにな

ったのは何故だろうか。それは、白人・黒人の人種差別が幾分緩和され、地域差が薄れてきたためだと思われる。

3章 洋楽と邦楽の歌詞関係 直訳は可能か

英語圏の洋楽を聴く時、我々の耳に入ってくるのは当然英語である。我々はそれを英語のまま聴く場合もあるし、頭の中で訳したり、対訳を参照して歌詞への理解を深めることもある。日本人が英語を訳す時、それらは多くの場合、様々な解釈がなされ、原文からは到底想起できないような歌詞に翻訳されることが多い。聞き手には、直訳では伝わらないのだろうか。もし不可能ならば、それには文化的な背景が起因しているのだろうか。また、歌詞の種類の違いも関係しているのだろうか。

ここでは、90年代前半、アメリカでビルボードチャート上位に入り、日本でも爆発的な人気を博した「To be with you」(Mr. BIG 作詞: Eric Martin, David Graham)を取り上げ、私が直訳を試みる。

Hold on little girl

(頑張れ、幼い少女よ)

Show me what he's done to you

(僕達が彼が君にしてきたことを示すよ)

Stand up little girl

(立て、幼い少女よ)

Broken heart can't be that bad

(壊れた心はあんな悪くならない)

When it's through, it's through

(それがずっと続くけれども)

Fate will twist the both of you

(運命は君達二人をより合わせるだろう)

So come on baby, come on over

(だからおいでベイビー、おいで)

Let me be the one to show you

(僕を君に示すために一つにしておくれ)

I'm the one who wants to be with you

(僕は君と一緒にになりたいその一人)

Deep inside I hope you feel it too

(深い内で僕は君にもそう感じて欲しいと願っている)

Waited on a line of greens and blues

(緑や青の線の上で待っていれば)

Just be the next to be with you

(君と一緒にいるためにちょうど次になるだろう)

直訳を試みたが、一部意味が通らない箇所を除いては、概ね理解可能な範疇に入るだろう。ただ、“you”の意味を、恋人へ向ける「あなた」、友人へ向ける「君」、「大多数の人」、など解釈の仕方は幾通りにもなる。“you”のほかにも、意味が曖昧なものがある。それらの解釈は各人の自由である。

ここでは、“you”を恋人に対する「君」と捉えた。“I'm the one who wants to be with you”とあるように、恋愛の歌詞であることがわかる。恋愛とは人間にとって普遍的なものであるが故に、文化的背景などは関係なく、直訳でもある程度意味が通じるのかもしれない。

では、恋愛ではなく、個人の内面を歌った歌詞ではどうだろうか。このような場合、それなりの文化に対するバックボーンがなければ理解できず、直訳は不可能と推測される。

ここでは、「最も若者の『憂鬱』を描く孤高の天才詩人」(o. k. computer 東芝EMIより)と称され、世界的に人気を得ているRADIO HEADの、日本でもとりわけ人気のある代表曲を取り上げ、私が直訳する。

「Let down」(作詞：Thom Yorke)

transport.

(輸送。)

motorways & tramlines.

(高速道路そして市電の路線。)

starting and then stopping.

(出発すること それから 止まること。)

taking off & landing.

(離陸すること そして 着陸すること。)

the emptiest of feelings.

(最も空虚な感情。)

sentimental drivel.

(心情的なよだれ。)

clinging onto bottles.

(瓶にしがみつくこと。)

when it comes it's so so.

(それが来たら、それはそうなる、そのように。)

disappointing let down and hanging around.

(失望させること 気が抜ける うろつくこと。)

crushed like a bug in the ground.

(虫のように地面に踏み潰される。)

let down and haNGiNG arouNd.

(気が抜ける そして うろつく。)

ここでも、意味の解釈が曖昧なものがあるが、私は上記のように解釈した。

直訳の結果、第三者には全く意味が伝わらない。退廃的な歌詞内容であることは想像できるが、その真意の程は理解困難である。全ては何かの比喩なのかも知れない。

歌詞とは本来私的であるものだと考える。つまり、歌詞に共感し、理解したと思いついても、それは砂上の楼閣に過ぎない可能性もあるわけである。文化背景が異なる以上、その生活環境で育ってきた者でなければ、歌詞の性格上、真に理解することなど不可能であろう。ただし、人間の本質

的な部分の歌詞—恋愛—では、若干誤読が生じる可能性があるものの、直訳で十分第三者に訴え得る。

4章 おわりに

今回の調査で、日米におけるヒット曲の歌詞の大半は恋愛歌詞ということが判明した。と言っても、それを一つに括ることはできない。邦楽では、74年では女性の地位の低さが象徴的な歌詞が多く、91年では男性が女性に対して想いを抱く歌詞が中心であった。使われている言葉・長さも異なり、91年の方が、より複雑かつ、文の切れ目が分からないほど長い傾向にあった。

洋楽の場合では、やはり恋愛系の歌詞が主流であったが、こちらも使われている単語の質が異なっていた。同じ「愛する」でも、91年では直接その意味の動詞を使っていたが、74年では、風景を描写してみたりなど、聞き手にイメージを委ねるような手法が取られていた。これこそ、「音と詩の融合」（小泉 1977年）（注7）である音楽の楽しみ方であろう。

日本語と英語の関係として、双方向性はなく、単なる直訳では意味が十分伝わらないことがわかった。そもそも、異文化の中で創造されたものを、全く違う環境で育った人間が正確に理解することは不可能であろう。では、我々はそのような場合どのように対処すれば良いのだろうか。言葉はニュアンスであると考え。「私」、「僕」、「俺」、どれも同じような意味であるが、使う時と場所が異なる。それらの微妙な違いは日本人以外には理解し難いだろう。曖昧なままで良いのではないだろうか。微妙な言い回し、それから生じる誤解、それらがあるからこそ、我々は言葉の違いを認識し、自らを見つめ直すことができる契機を得るのではなかろうか。

注1)

小島美子 「歌をなくした日本人」 音楽之友社 1981年 P.29

注2)

オリコン：

【商号】 株式会社オリコン
【創業】 昭和42年5月
【設立】 昭和42年11月
【資本金】 110,000千円（額面500円）
【発行済株式総数】 220,000株（普通株式）
【従業員】 85人（男性59人、女性26人）
ヒットチャートを専門としている企業の中で最も古く規模が大きい。
<http://www.oricon.co.jp/profile/index.html>
(8/30)

ビルボード：

ポップのヒットチャート決定者として絶対的権威をもつ「ビルボード」紙は、1894年創刊された音楽とレコードに関連した各種データが載っている音楽専門紙。

全国各地のレコード売上状況、業界のイベントや人事異動、アーティスト・ニュース、新作LP紹介、特集記事、10種余りのチャートなど各種音楽関連ニュースが盛りたくさんである。

<http://www.usatips.net/japanese/culture/arts02.html> (8/30)

注3)

パンクロック：

60年代後半、アメリカで無名のグループ達
がパンク（不良・チンピラ）と呼ばれたのが
始まり。彼らの多くは、自宅のガレージで練習して一攫千金を狙ったが、短命で終わった。その行動がパンクを連想させ、70年代と区別

してガレージパンクと呼ばれる。一般にパンクロックは、社会への不満、攻撃性を持ち、歌詞は破壊的でありながらもユーモアがある。

北中正和 「ロックスーパースターの軌跡」
講談社現代新書 1985年
7章 パンクとレゲエ 「俺は暴動が欲しい」 P. 165～192

注4)

小島美子 「歌をなくした日本人」 音楽之友社 1981年 P. 29

注5)

「音楽誌が書かない“Jポップ”批評3」 別冊宝島編集部 2000年 P. 16

注6)

2番：曲は“verse”と“chorus”で構成される。“verse”は曲を成す節、連であり、“chorus”は合唱部分、折り返しを表す。本稿では、“verse”と“chorus”を一つのまとまりと見なし、1番とする。それに続く“verse”と“chorus”を2番とする。

(ジーニアス英和辞典 大修館 1988年P. 312、P. 1990)

注7)

インストゥルメンタル曲：instrumental(of or for musical instruments)

楽器のみで演奏される曲を指す。

(オックスフォード英英辞典 開拓社 1974年 P. 450)

注8)

小泉 文夫 「音楽の根源にあるもの」 青土

社 1977年 P. 129

参考資料：

- ・「音楽誌が書かない“Jポップ”批評3」 別冊宝島編集部 2000年
- ・佐藤 良明「J-POP進化論 “ヨサホイ節”から“Automatic”へ」 平凡社新書 1999年
- ・小島美子 「歌をなくした日本人」 音楽之友社 1981年
- ・北中正和 「ロックスーパースターの軌跡」 講談社現代新書 1985年
- ・加藤登紀子 「日本語の響きの中で歌いたい」 NHKブックス 1990年
- ・FM [FAN] 編集部「ミュージックデータ・ブック」 共同通信社 1996年
- ・Composite 22 幻冬社 2001年
- ・小泉文夫 「音楽の根源にあるもの」 青土社 1977年
- ・ジーニアス英和辞典 大修館 1988年
- ・オックスフォード英英辞典 開拓社 1974年
- ・Beth Orton 「I wish I never saw the sunshine」
- ・Mr. BIG 「to be with you」
- ・RADIOHEAD 「Let down」
- ・<http://www.geocities.co.jp/MusicStar-Guitar/7573/jchart/Oricondata.html> (9/21)
- ・<http://members.tripod.co.jp/heavylister/index43.html> (9/21)
- ・<http://www.uta-net.com> (8/26)

() 内は最終アクセス日